
《ベルンのフィシオログス》挿絵研究 - そのプログラムに関する一考察 -

東京芸術大学 長友 瑞絵

カロリング朝ランス派制作の《ベルンのフィシオログス》(Cod. 318、ベルン市立図書館所蔵)はフィシオログス写本の系譜上、現存最古の挿絵入り本として貴重な作例である。2世紀にアレキサンドリアで成立したキリスト教的博物譚『フィシオログス(自然認識者)』は、百科全書的テキスト構成を持ち、各編では種々の動物・植物・鉱石について、外観や性質および、その寓意と教訓とが新旧の聖書の引用と共に語られる。西欧を中心に多数の翻訳版が流布し、その直系として12世紀末には『ベスティアリ(動物寓話集)』が派生した。

ウッドラフ(1930)以来、ベルン本の挿絵は古代末期のプロトタイプから継承した自然主義的様式と、ランス派の写本制作における図像見本帳としての役割が重要とされてきた。そしてその際、フィシオログス写本の図像伝統から逸脱する冒頭の「ユダのライオンに祝福を授けるヤコブ」、並びに、テキストがそれぞれ聖アンブロシウスの『ヘクサエメロン』およびセビーリアのイシドルスの『語源』からの抜粋と同定された「雄鶏」「ウマ」の合計3点は後補として除外視されることとなった。確かに冒頭の挿絵と最後の「ウマ」については、ベルン本と同系統(Cヴァージョン)写本との比較から、特にベルン本だけに加えられたと推定できる部分である。しかし一方、写字生自身も自分一人でベルン本全体を制作したと奥書に記したように、挿絵全体は統一された様式を呈しており、むしろこの特殊部分に同本の特質を探る手掛りがあると考えられるのである。本発表は、これまで等閑に付されてきた冒頭「ユダのライオンに祝福を授けるヤコブ」と最終の「ウマ」編挿絵までを改めてベルン本の総体として視野に入れ、そこに形成される独自のプログラムの存在を提示するものである。

考察にあたっては、まず各編の主題のオーダーに着目しプログラムについて検討する。従来その主題オーダーは何ら秩序を持たない、単なる積み重ね構造とされてきた。だがバクスター(1998)が初めて指摘したように、その構造は分類学的な規準に拠ってではなく、神学的規準によって明らかにされるべきものである。ベルン本の主題オーダーをこうした観点から分析すると、共通テーマに基づく複数のグループが編成され、独自の予型論的救済プログラムを構成していることが認められる。さらにこれを踏まえ、冒頭「ユダのライオンに祝福を授けるヤコブ」挿絵の再解釈を試みると、ヴェネツィア、サン・マルコ大聖堂アトリウムモザイクの《創世記》、「アダムによる動物の命名」(古代末期の創世記写本に基づく13世紀のコピー)場面等と構図および図像的な類縁性を示すこの挿絵は、「ユダ - 神 - キリスト - アダム」という予型論的思想を視覚化しており、図像とオーダーという二元要素から成立するベルン本の重層的救済プログラムを集約する機能を持つと考えられる。